

## 古代社会の大産業革命と異民族の融和

——水耕稲作乾田栽培方式——

——異民族の衝突日本列島では融和——

日本先史古代研究会会員 山崎泰二

### (一)稲作の原産地はインドから始まった

稲は日本の在来種ではありません。一般の方は（戦後の学校教育では）稲作開始が弥生時代の始まりと教わりました。石の道具を使う先人が新石器時代を築き、狩猟（動物・植物）をしていたのが縄文人で、肉の煮炊きのために縄文土器が発生したと一般に教えられているのです。しかし最近の学者や専門家の定説は少し違うようです。

ノートルダム清心大の高橋護(まもる)名誉教授(岡山在住)らの研究が学会の定説になっていることを知りました。縄文時代(今から1万5000年の昔に1万3000年間続いた時代)の中頃には動物の狩猟・植物の採取から家畜の飼育、穀類の栽培が始まっているとのこと。青森の三内(さんだい)丸山縄文遺跡では、野生種の栗の中から粒の大きいものを選んで住居の近くで栽培し、集団で何代も定住していた様子が明らかになっています。縄文人は狩猟や、硬い果実(栗・どんぐり等)を採取し、川を遡上してくる鮭・鱒などを簡単な木弓や槍で捕っていたのです。塩分は生肉から得ていました。石器時代から面々と繋がっている縄文人も、元々大陸から移動してきた旧モンゴロイド人です。(旧モンゴロイドの発生地は現在のインドネシアを源郷にしたスンダランドより海洋・大陸を北上した) この地球の最後の氷河期が終わるのは1万年前ですが2万年以前は大陸と陸続きで、海面が今より130mも低かったそうです。瀬戸内海は草原でマンモスが生息していたのです。今でも底引き網漁業でマンモスの骨が揚がり話題になることがあります。人間も歩いて移住して来ました。氷河期以前から移住して来ていた旧モンゴロイドと、寒い氷河期を大陸で経験した新モンゴロイド人に外形の差は多少あっても同じ黄色人種です。新石器時代から住む原住民との合体が日本列島で縄文人として進化します。 **図-2 縄文系を参照 《第一の融和》**

彼等は大陸の穀物を持ち込みました(粟や稗)。特に稲・米は他の食材に比べて灰汁(アク)がなく美味しいことを知っていました。栽培は原則畑作＝陸稲で、なだらかで配水の良いやや傾斜した土地を選び焼畑農法で栽培を始めるのです。肥料分がなくなり、連作障害が出始めると移動して行きます。小動物の捕獲に犬などを使っていましたが収穫も限られていますから人口も当然少なく、動物性蛋白質は先に述べた通り河川を遡上する大型の鮭・鱒などが得やすい食べ物でした。一般に列島内における縄文人の分布は東北北陸地方が多いのです。その末流が青森の三内丸山遺跡でありアイヌの人々でありましょう。

稲作が発生したインドや東南アジアそして中国の揚子江流域では、水耕稲作の初期の姿が発生します。しかし大河の土地の排水は今でも克服されていません。粟・麦やトウモロコシより湿地に強い稲の栽培が進んだのです。同じ中国でも今の北京等の華北地方は現在でも畑作が中心です。ジャポニカ種の稲にも熱帯種と温帯種に分けられるようですが、日本には温帯タイプが定着しました。

### (二)稲作の日本列島渡来

紀元前500年ごろの中国は、孔子が儒教を説いており、あの有名な万里の長城を秦の始皇帝が、北方騎馬民族の襲来にそなえるために、民衆を駆使して建設遂行中でした。大陸の戦乱は民衆を巻き込み、

敗北は民族の抹殺と奴隷としての悲惨な道しかないのです。始皇帝亡き後の三国史時代歴史書に登場する劉邦・項羽や軍師の諸葛孔明が活躍しました。当時の戦いは部将(軍隊)だけの戦いだけではありません、民族同士の闘いです。北方騎馬民族にやられた華北の漢民族は南部の華南地域の国々を襲います。弱い人民の多くは土地を捨て、決死の思いで海(東シナ海)に逃げます。竹筏(タケイカダ)を繋ぎ合わせた簡単な舟に帆と櫓で大陸棚を横切り、それを過ぎると暖流の北上する黒潮の大きな海流に乗ることが出来ます。当面の食材の稲米などを持参していました。雨水を飲料にしてしのぎます。先ず五島列島・九州島が漂流地です。緑の山が遠くに見え隠れし段々と近づくと、歓喜の思いで上陸。美味しい水を飲み、柔らかい果実を堪能し生きる希望が湧いて来ます。幸いにこの地は温暖でした。(五島列島では記紀に符合する史実の地が残っていて、その研究成果を「日本国家の起源・五島列島に実在した高天原」として松野尾辰五郎氏が発表された本を娘さんの村山三枝子氏＝岡山在住が再版されそれを拝読しました。稲作伝来と記紀が符号する貴重な資料です。) **図-1 日本近海海流図を参照**

先にも少し述べましたが稲は本来「連作」の出来ない代表的な穀物です。それを弥生人が水耕稲作乾田方式の栽培技術で連作可能な穀物に変えたのです。同じ米を畑で麦と同じように栽培すれば連作障害が現れるのです。新しい上流の水を田に供給すれば、水の中には豊富な栄養分と空気が含まれていて、まさに自然農法が確立していたのです。重要なのは稲の生育途中で完全に排水をして田の表面を乾燥させるタイミングを伴う技術であります。程よい落差があつて小区画の面積の田の方が、排水管理がしやすいのです。1粒の稲籾は約40株に殖えそれぞれに稲穂が付きます悪くて2500粒、良くて4000粒になることが景山詳弘(よしひろ)先生(岡大名誉教授)の自然農法の実証(平成22年)で確認されています。

彼等は三々五々上陸した大きな河口から配水の管理が容易な小さな小川の水辺を求めて遡上して行きます。程よい岸辺に畦を作り川の水を導入し、小さな区画は水の管理(給水・排水)が容易に出来るのです。持参した稲籾を蒔きます。半年もすれば稲穂が垂れてくるのです。日本列島の先住民である縄文人が、魚を捕獲するために川辺に来て、異人達(新渡来人)の様子を伺っています。収穫期の稲穂を見て驚きです。自分たちの焼畑で作る同じ稲が何倍もの収穫を同じところで得ているのです。羨望の眼差しで新渡来人の生活を覗き様子を観察しています。《**第二の融和**》

### (三)外来人と在来人の平和的融和は世界史上特異なもの 高く評価すべき！！

世界の歴史の中で新渡来人と在来人が戦いをしないで融和したのは、この当時の日本列島の大きな特徴で高く評価されるべきです。新しい人種＝弥生人が誕生することになります。先に述べたように中国の江南地方の戦乱を回避して海に逃れ親潮の暖流に乗り日本列島に漂流した渡来人。大陸では本来、異民族と衝突すると、生きるか死ぬかの戦いが当然の時代です。漂着した避難民は少数で武器等は持っていません。裸一貫の無防備状況です。在来人の襲撃を受けますと一たまりもありません。殲滅の危機状態でした。 **図-2 江南系(稲作民族)を参照**

列島内での縄文人は西日本には分布も少なかったことや、生活の手段の場が違っていたこともありましたが、しかし最大の理由は先に述べた通り、縄文人も陸稲(おかぼ)で稲の栽培を既に行っていたこと。渡来人の新技术のレベルの高さに驚嘆し羨望の眼差しで見っていました。収穫は少なく移住を余儀なくされる焼畑農作より、小川の付近に定住して同じ場所で豊富な収穫のある水耕稲作は、現代人が電気を発明し自然界には存在しない原子力を、平和利用と称して発電に利用している今日の比ではありません。その証拠に原発はわずか50年で崩壊しましたが、水耕稲作はその後2500年後の今日まで続き、これからも益々重要な食の原点であります。

渡来した人々にも弱みがあります。東シナ海を渡って来た江南人は婦女子が極端に少なく屈強な男子

社会でした。在来人との融和は子孫を残す上でも必要なことです。幸い同じモンゴロイドの黄色人種です。言葉も自然に通じ合い、和合の度合いが益々増えます。稲の栽培方法は違っても、石包丁や土器・農具など穀物栽培に関して共通点も助けになりました。食べられる山野の果樹の実など、縄文人の生活の知恵はそのまま引き継がれました。

#### (四)当時の生活の様子(主に弥生時代)

稲＝米は他の食材に比べて保存可能で、2～3年の災害等で収穫が出来なくても再起が可能でした。食生活が充実しますと、自然に人口は増えます。共同作業をして耕地を拡大すれば成果も大きく、川上の小川の辺から始まった水田も段々と広がって、中流域に達します。給水・排水の利便には農業土木の技術の発展(農具の発展)が必要です。当時の日本列島で鉄は産出していませんが、部材として使った形跡が残っています。黒曜石のサヌカトなどの石器は隠岐や伊豆諸島から運ばれて広がっています。そろそろ金属加工(主に銅製品)の技術集団の発生を見る時代に入ります。

穀物を主に食材とするようになって、困るのはミネラル＝塩の補給です。海に近いと貝や海の魚から得られますが、山間部では不足しますし野生の狩猟も限られています。海で採れた海藻や魚介類を干物にして、米と交換する集団が発生します。製塩も専業として始まったようです。山間部では薪や炭を農閑期に作る光景は今日まで続いています。その炭は金属加工に必要でした。薪は製塩に欠かせません。

縄文・弥生の人々は私有の概念がありません。全て共同作業・共同生活です。海辺で魚介類を採取し生活は安全な高地で住居し集団で暮らしました。岡山県でも水島の種松山、児島の貝殻山には高地性集落や貝塚の跡が残っています。海の魚を捕らえるより浅瀬の海で貝類を捕獲する方が容易でした。貝塚の多いのもその辺の事情でしょう。余談ですが人間は素潜りで海中の中で目を開けても良く見えません。箱メガネなどの道具や潜水用具の発達が必要です。しかし鵜のように水中で潜水し魚を捕らえる鳥たちを身近に見ていました。鵜飼の始まりは以外に早く、記紀(古事記・日本書紀)の始めの段階にも出てきます。今日でも神聖化して宮内庁の管理のもと伝統漁法が伝わっています。当時の人間の観察力はすごいですね。

魏志倭人伝にも絹のことが出ています。生糸(養蚕)は5世紀に伝わったとされていますから弥生時代は絹の生産はありません。しかし栽培種の粟に巻きつく山繭の存在を彼等が見落す訳がありません。中国地方の山塊を散策していると、今でも山繭を見かけます。金糸は貴重でした卑弥呼が中国の魏王に献上したのは黄金に輝く金糸であったと想像しています。漆の採取も知っていたことでしょう。吉備の山間地には漆の木が多く自生しています。漆技術は中国より日本列島の方が1000年も早く縄文中期の遺物が出ています。

繊維質の多い麻や三桮(みつまた)・コウゾは今では和紙の材料ですが当時は、水にさらし柔らかくして布にしました。木綿(ゆう)と書きますが綿から採った糸で編んだ今日の木綿(もめん)ではありません。着物は当時機織が有りませんから当然女性らによる手織りでした。枝に縦糸をつなぎ睡でシャトルのように行き来して編み上げて行ったのです。今でも布の幅は女性の肩幅(3～40cm)と決まっています。女性は貫頭衣として、男性は横幅布衣として着用しました。獣の皮も重要な衣類でした。

住宅は竪穴式から高床式に徐々に変わります。穀類の保管には今も昔も鼠との戦いです。材料は近くの木材を使いました。中でも栽培種の粟材は重宝のようで縄文住居跡からも出土しています。実を食べ貯蔵穴に保管した貴重な食材は住居の柱になり薪や炭になりました。

この頃食卓に銘々皿が出るようになります。高杯(たかつき)(古代文字＝籩豆へんとう・たかつき)は古代には豆の文字をあてました。高杯の形が豆に似ているからでしょうか。豆は米などの外来種ではありません。

日本列島の在来種だと岡山大学の山本悦世教授に教わりました。豆は自分の力で栄養源の窒素を作り出す貴重な食材で、東京農大の小泉武夫名誉教授は「田圃で稲を作り、畦に植えた大豆が貴重な食材になった」「先人に学ぶべきだ」との説に敬服したものです。当時箸は使いません。手で食べていました。美味しいものが食卓に並びますと「指食が動く」と申します。今でも人指し指のことを「食指」と称しますと佐原真先生は話していました。「箸」は8世紀になり普及したようです。卑弥呼女王も手食でした。箸の持てない子供と同じですね。地球上には今でも手食の民族が残っているようです。

## (五)稲の富が人口を増やす

生活が多様で豊かになりますと人口は当然増えます。先に見たように水耕稲作が進歩しますと、周辺の仕事が特化され専門化します。耕作地を増やすために丈夫な農具が必要です。硬い木材を石斧で加工していましたが、金属加工の技術が少しずつ入っていきます。当初は銅やその合金でしたが、大陸や朝鮮半島から鉄材が入ります。貴重な鉄材は再加工して何度も使いこなします。

余談になりますが、歴史区分をする時に世界史的には武器を中心に行います。石器・青銅器・鉄器・と続き今は原子爆弾の時代と称すべきでしょうか。日本では生活用品で表します。石器は同じですが縄文時代はあの炎形の縄文土器。弥生も弥生土器が東京文京区の東大農学部のある弥生町から出土した土器から命名され、続く古墳時代は祭祀の場でもある墓が世界的に見ても特異な形(前方後円墳)で400年間も続きました。後は政治の中心地＝都の場所が時代区分になっています。日本人は元来戦いを好みません。西洋人かぶれをした先の敗戦体験による反省から、新憲法で戦争を放棄し、軍隊をも持たず武器を作らないと宣言しました。今の政権は武器の製造と輸出を許可するそうです。

農耕中心の弥生人は、在来の縄文人と中国江南地方の流民の混血・和合によって日本列島を席卷して参ります。自然との共生による集団社会が想定できます。九州北部などでは環濠集落が発生します。共同作業をして自分たちの財産を守るにはある種の柵や濠が必要でした。学者によっては「弥生人は戦闘が好きで、余力が出来るると近隣の集落を攻めた」と説明しています。確かにその面も否定できませんが、岡山の地で古代吉備を想定する時そのようには見えません。集団としての帰属意識を高め、ある種の今の言葉で「宗教的」な祭祀が始まったと見るべきでしょう。余力を戦闘ではなく、新しい祭祀へ集結したと考えます。

私は稲作生産の余剰力は他の物資との交換・交易に使われたと思うのです。物資だけではありません当時の文化情報も相当に進化していました。紀元前500年前後に中国で発生した道教が鬼道の形で日本列島に弥生の中期～後期には入ってきています。魏志倭人伝の卑弥呼の件(くだん)は有名です。その道教は日本社会に深化し、神事・仏事と合体し今なお我々の生活の中に生き付いているのです。今年は十二支の龍(辰)年です。これも当(まさ)に道教の世界なのです。特に道教は自然との共生による世界観でした。弥生社会には大切なことです。自然崇拜から先祖崇拜。そして情報物資の交流・交易が当時の人々の関心ごとだったのです。もう少し掘り下げてみましょう。

## (六)弥生時代の祭祀

先にも述べましたが農耕を中心とした小集落の弥生社会にとって一番重要なのは、太陽や雨風の自然現象です。弱い人間の力ではどうすることも出来ない自然との共生は、先人の知恵の継承が大切で、そうした知恵の保有者が集落の中心人物として尊敬されました。最も良く知られているのが日本特有の銅鐸です。一般に祭祀に使われたと説明されていますが、当時大切な金属を農具や武器ではなく祭祀に使ったことが重要な意味を持ちます。(大陸では主に武器に使った)一般に銅鐸は後に大和と称される畿内地方

を中心に山陰地方まで広く分布しています。どうした訳か九州では殆ど出土していないのに、鑄型だけは九州で出ているのです。銅鐸は中国江南地方の銅鼓(どうこ)が原点との説もあります。稲文化と共に伝来したのでしょうか。

元々金属加工技術の発達をしていたのは、朝鮮半島南部と同族の倭族が九州島北部・隠岐出雲一帯で、九州で創られた銅鐸は出雲で量産されそれが畿内まで波及したと考えてみるとその方が自然と思えます。対馬海流に乗ると能登半島・若狭湾は近く、琵琶湖を経由すれば以外に畿内には短期間で交流が出来ます。銅鐸を用いて集落でどのような祭祀が行われていたのか、学者ははっきりと示してくれません。

平成8年(1996)島根の加茂岩倉で農道建設中に偶然に39個が纏まって発見されました。直後に私も現地に伺いまだ作業車などが乱雑していて生々しい山肌に接したことがあります。すぐ向かいの山の中腹には大きな岩が乗り出していて、昔から神秘的な場所、磐座(いわくら)として今日まで崇拝され地名も岩倉として残っているくらいです。一説によりますと「ヤマト勢力等の外圧に周辺の三十九の国々(集落)の首長が集まって、銅鐸を埋蔵し外敵から略奪されるのを守った」とも考えられます。弥生時代末期には出雲固有の文化(四隅突出墳丘墓)が突然消えて畿内のヤマト式の文化が進展するタイミングです。魏志倭人伝で邪馬台国に卑弥呼女王がおり、吉備楯築遺跡では大型の祭祀用墳丘墓が新しく建造中でした。出雲の加茂岩倉に近い荒神谷遺跡からは銅剣358本銅鐸6個銅矛16本等青銅器が大量に発見されました。昭和59年(1984)のことです。当時の出雲が九州の銅矛文化に劣らない金属加工の先進地であり、技術を持たないヤマト勢力から見ると喉から手の出るほど欲しい集団でした。記紀でも出雲を脅したり、褒めたり柔和策を講じます。吉備や筑紫の前に、出雲を味方に入れるのですが……。当時の畿内は日本列島の中で遅れていた地域でした。

北部九州では百あまりの国々が争っていたと倭人伝で伝えていて、それまでの銅鐸を全て銅剣・銅矛に鑄なおしたため、九州での銅鐸の出土が少なく銅剣・銅矛の進展地になったとの説があります。確かにそうかも知れませんが、銅剣の殺傷力は疑いものです。それよりも銅鐸に代わって祭祀に用いられた新式の祭祀用具と考えてみると理解しやすいと思います。

九州は佐賀の吉野ヶ里遺跡でお解かりの通り、環濠集落を形成し墓は甕棺式で埋葬しますが一部に特別な墓も存在します。弥生の初期に中国の江南地区から漂流してきた農耕民の姿ではなく、華北の魏国と交流し次の世代を構成する新しい息吹を感じます。金属加工技術は列島の中で一番進歩していましたし、中国との交易権も保持していて単なる農耕民の姿ではありません。出雲も先に述べたように四隅突出墳丘墓を有する特異な祭祀を形成していました。吉備はそれらの各地方の文化を術からず吸収、特殊器台を用いた双方円墳(前方後円墳の直前の原型)で自分たちの氏族のトップを崇める吉備固有の祭祀を確立します。祖先崇拝から首長崇拝の新しい文化が発生していたのです。

## **(七)騎馬民族との合体 海人族の活躍 新しい国体の発生**

集団(国々)を具体的に引っ張って行く能力を持った指導者が必要とされました。これまで多くの説明は江南地方を源とする稲作文化・海上から神々が到来したとする祖霊信仰を持った農耕民を描いてきましたが、弥生の末期になると中国を統一した華北の魏国と交流し、朝鮮半島から騎馬系民族の文物が入ってまいります。騎馬民族特有の下辺の短い木弓のことが倭人伝に出ています。騎馬民族特有の弓を卑弥呼たちは既に使っていたのです。季節によって位置が変わる太陽ではなく、北極星を中心とする星座の知恵が迷える農民を救いました。草原を駆け回る高天ノ原の世界は新しい夜明けを意味します。邪馬台国の指導者にこれら騎馬民族の風俗など共通する点が多く出てまいります。

隣国中国も国体が変わり(西暦265年に魏が滅亡)朝鮮半島も激動の時代です。魏国との交流をしてい

た九州族は勢力のバックアップを失います。畿内を中心とする勢力が吉備の新しい思想と融和し、大国出雲を傘下におさめ、外国との交流権を駆使するために、在来の有力な海人(かいじん=あま)を傘下に抑えます。彼等は交易を通して情報・文化を先取りしていました。記紀の初期の内容は騎馬民族や海人達の活躍を生き生きと描いているのです。天(あま)=海(あま)と程よい結びつきをして、先住民の農耕民族=弥生人と、ここでも素晴らしい融合をしているのです。形の上では前方後円墳式の祭祀を行い、日本固有の鏡を用い道教・儒教・天道の思想で大陸とは一味違う国体が造成されます。騎馬民族が日本列島に弥生末期に到来し農耕民族である弥生人とうまく融和した傍証はいくらでもあります。記紀には海人系神話と騎馬系神話を随所に取り混ぜていて一方的にどちらかが優位な形で支配した形跡を消しているのです。

**図-2 北方系騎馬民族を参照 《第三の融和》**

平成 23 年のNHKの朝ドラは「おひさま」でした。信州(長野)安曇野(あづみの)が舞台で、主人公の陽子の清楚な姿と犀川の支流安曇野川の清流がとても印象的でした。この安曇は古代海人族の代表格です。筑紫に想定される「天の高天ノ原・天の安川」付近の地名が信州の安曇一帯に広がっています。穂高・有明・筑摩・犀川などがそうですし、(高千穂)穂高神社も存在します。安曇族の本拠地は福岡県の志賀島とされ、多くの海人族の統括集団であり、記紀に登場し後の王家(天皇)に近い有力古代氏族として成長します。後の王家になる騎馬民族は列島支配に海上権を持つ海人族をうまく利用したのです。九州・出雲・吉備の持つ制海権を安曇族にとって変わらせる秘策がありました。**図-3 3世紀の東アジアを参照**

古墳時代を経てヤマトの国体は列強に伍す程の力量に発展します。吉備は重要な役割を果たした痕跡が多く残っています。歴史は面白い。楽しみながら学びを深めて参りましょう。

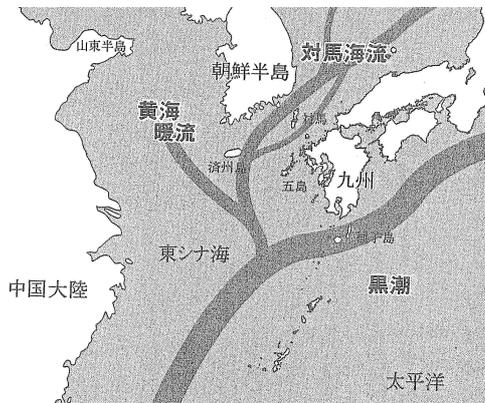
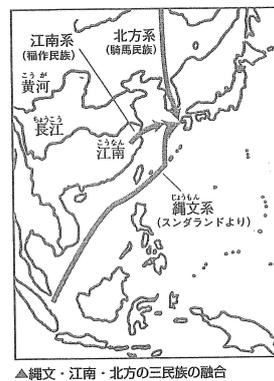


図-1 海流



▲縄文・江南・北方の三民族の融合

図-2 三民族の融合



▲3世紀の東アジア

図-3 邪馬台国 卑弥呼の時代